

# アーバングリーン のすすめ

# ライフ

文：進士五十八(東京農業大学教授)

## 野生の思考 緑水土農あつての人間生存

昔のひとは、自分たちの生活に役立つ動植物に名前をつけた。根っこが薬になるもの、葉っぱが発酵して染料になるもの、実が食べられるもの、切り傷を治すもの、下痢に、便秘にとか、灯明に松明とか、何ごとにも天然自然資源に頼るしかない。必要な資源を大自然から見つけ出し、生きてゆくために手元に集め、飼育、栽培する。野生の鶏を飼育して、卵や肉をとるために改良したのがニワトリ。植木の場合はニワキ。ニワとは人間の生活の場。家畜化されたときに名前にニワがつくのである。

いまでは世界共通の国際命名規約で、すべての生き物には「学名」が与えられているが、昔は有用植物にだけ名前があった。その国、その地方、その集落独自の呼び名である。子どもたちに正確に伝承しなければならぬ「生きる知恵」であった。当然、根と実の両方が有用であれば、その植物は2つの名前があったし、何の役にも立たない植物は名前もなかった。

日本人にいちばん大切なイネの生育を邪魔する植物は「雑草」といわれた。『ファール昆虫記』は日本ではよく読まれるが、生国のフランスではそうでもないらしい。肉食の国では、牛、馬、羊など有用な家畜ではない昆虫などは関心の外であったのだろう。

科学の目以前のこうした『野生の思考』(クロード・レヴィ＝ストロース著)はいまや忘れられているが、人間の本能を刺激するような「自然とのふれあい」の原形がここにあることを思い出さなければならない。

たとえ大都会で暮らすひとたちでも、果物のなっている風景、稲穂の穂る風景に、なぜか懐かしさを感じ、癒される。人々のなかの野生性が呼び起こされるからだろう。

## 緑の量 グリーン・ミニмум50%

20世紀は科学技術文明がすすみ、農村は都市化されていった。近代化である。近代では何ごとにも機能的か合理的かで判断され、効率性が重んじられる。その結果、便利で快適で、経済大国になった。そんな都市では、道路に葉が落ちて汚い、市街地のなかに農地があつては土ぼこりが舞う、隣家の庭木が目障りだ……と苦情をいうひとが増える。整然と区画された公園や花壇しか「都市の緑」ではないと思うひとが増える。高度経済成長に酔いしれた多くの日本人の感じ方であった。

前述した『野生の思考』のように「人間と自然の本質的關係」を深く掘り下げるよりも、表層で「花や緑」を叫ぶだけだった。それがいまようやく、趣味の園芸から出発して、ガーデニングブームが深まり、ファームリング(土と農)の重要性に気づきはじめた。単なる一本の花や樹木ではなく、巨大人工都市のなかで人間が生きつづけるためには、いかに多様な「生物的自然との永続的なふれあい」が不可欠に気づきはじめた。アル・ゴア著の『不都合な真実』に象徴されるように地球レベルでの政治的課題として環境問題が浮上しているからであろう。人工化、高層化、過密化が加速している大都市に生活する実感としても「人と自然のバランス」「人と自然の共生循環」は無視できない。社会全体がやっとそう考

えるようになってきた。

私の研究「住環境に於けるグリーン・ミニмум」(1975年)では、日常生活圏300×300m単位ごとに50%以上の自然面率が必要ということになっている。

緑面のみならず農地のような土面、河川や池など水面のほか、河原など砂利面でもかまわない、その合計が自然面。空気が入って水が浸み込みバクテリアが生きられる自然面率が50%以上でなければならない。これは東京都世田谷区成城の緑に匹敵する数字だが、どんなに都心でも50%以上は必要という考え方である。都心では屋上緑化面、透水性舗装面もカウントしてよいかもしれない。ただし、外気に接していないアトリウムは緑は駄目。ともあれ、緑充足度、雨水浸透、微気象緩和など物心両面からのグリーン・ミニмумが50%である。

## 緑の質 生き物を育む農、オーガニックな緑

グリーン・ミニмум論での緑は、形や種類、土地所有を問わない。樹木でも芝生でも農地でも、公園でもプライベートな個人庭園でも、道路のなかの緑でも河川緑地でもかまわない。全体の自然面量と、それが血管のように地域の隅々まで連続して系(システム)をなすことが大事なのである。

ひとの健康が身体中を血液がめぐり、神経が行き届いていなければいけないのと同じで、どこかにあるから、ここにはなくてよいというものではないのが「人間と自然の關係」の留意点なのである。

このとき最も有効なのが「都市農地」である。いまではモザイク状にしか残存していないが、市街地内にある農地、これはも

う地域の住民にとって大切なお宝である。公園だけでは自然面量が足りないからではない。それもあるが、農地には公園にはない緑の意義がある。土を耕し、種を播くことで「生命を育む」ことができる。無機的で生命の大切さを忘れ、人間同士の連帯もままならなくなっている都会で農業体験ができれば、子ども大人もほんとうに人間らしい生き方を取り戻せる。「憩い」と「癒し」と「人間性の回復」である。

これまでの都市緑化の最大の問題点は、「緑化」という言い方にある。緑に化かす、灰色の都市を緑色にしなければならない。ただひたすらその義務感から「緑の倍増」と称して本数を増やすことだけを考える。「室内緑化・壁面緑化・屋上緑化」と、空いている隙間をただ植物で埋め尽くすことだけを考えた。本来なら、本数を増やす前に、植栽できる土地を増やすべきなのだ。地価が高いということでそれをやめ、既存の公園や道路のままに本数を増やそうとするから、植栽の密度は高くなり、敷化し、もやし状になってしまう。狭い場所に植物を無理やり入れるので、どこもかしこもサツキ、オオムラサキツツジ、アベリアの大刈込となる。

緑化は手段で、目的はランドスケープ(風景づくり)であることを忘れていない。その土地、その場所にふさわしいプランティングデザイン(樹種選択と配植構成)で美しい風景を現出しなければ意味がない。それなのに、公害に強い、台風に強い、剪定に強いと、メンテナンスする技術者側の論理だけで緑化してきた。これでは、市民の心は癒されない。

大きなビルの足元に、ただツツジ1種だけをベタに植え、ただ整然と刈り込まれ



## (市民農園) 区画案

23	30	8	16	23	30	8	16
22	29	7	15	22	29	7	15
21	28	6	14	21	28	6	14
20	27	5	13	20	27	5	13
19	26	3	12	19	26	3	12
18	25	2	11	18	25	2	11
17	24	1	10	17	24	1	10
23	30	8	16	23	30	8	16
22	29	7	15	22	29	7	15
21	28	6	14	21	28	6	14
20	27	5	13	20	27	5	13
19	26	3	12	19	26	3	12
18	25	2	11	18	25	2	11
17	24	1	10	17	24	1	10
17	22	6	12	17	22	6	12
16	21	5	11	16	21	5	11
15	20	3	10	15	20	3	10
14	19	2	8	14	19	2	8
13	18	1	7	13	18	1	7

現在地

ている景観から、はたしてバイオリジカルでオーガニックな気分を感じることができただろうか。まるで建築物の一部をなす無機質な部品にしか見えない。不揃いでも、土が露出して、畝が並ぶ農地風景のほうが、はるかにオーガニックである。メカニカルで無機質なガラスとアルミの現代的オフィスビルとのコントラスト（対比）において「緑」や「農」、そして「生き物」の存在が都市空間のなかで許される。オーガニックランドスケープであることが、生命線である。キャベツがあればモンシロチョウ、ナツミカンがあればアゲハチョウ、水たまりと草叢があればトンボが舞う「農」の緑だからこそバイオリジカルが実感できる。

アジサイやアサガオには雨滴がやさしいし、ハギやユキヤナギのしなやかな緑には、そよ風が似合う。オオイヌノフグリのかれんな青紫色、ニラやラッキョウの小さな白色からもバイオリジカルでオーガニックな風景が実感される。

## 「農」も都市インフラ

### 農林の多面的機能が発揮できる都市政策

鉄道、道路、上下水道、港湾などをインフラストラクチャーという。生産と生活を支える基盤のこと。これまでの近代的な都市づくりでは、工業地や商業地、情報拠点づくりに力点がおかれて、農業農村や林地は想定外であった。というよりも逆に、都市化イコール農林地の宅地化という考えで、農林地が残っていると都市としては未完あるいは不完全であるかのような錯覚さえしてきたように思う。

都市は城壁のなかで完結するものという外国モデルの都市像を描いたからであり、

実際面の土地利用では地価に見合った利用でないと成り立たないからであった。生産性の低い農業を、地価の高い、また宅地並みに課税された市街地で継続することは容易でない。

いま大都市では、30年間の長期営農を約束しなければならない「生産緑地」の指定を受けて、また不動産所得など他の収入を得て、先祖からの預り物の農地という財産を次世代に手渡すために営農を続けているわけである。

自然環境共生都市・エコシティこそ、21世紀人類の持続可能性を保障する都市である。そのためには緑地、農地、林地、水系をグリーン・ミニマム50%以上とし、これをネットワークしなければならない。東京都三鷹市では、その将来像を示す都市マスタープランを「水と緑の公園都市・三鷹」としている。このほか、埼玉県宮代町など各地で「農」のあるまちづくりが広がっている。国の宅地並み課税と都市農地潰し政策がすすめられたところでも、東京都世田谷区では「登録農地」を制度化し「都市農地課」という組織を設け、神奈川県横浜市では「農業専用地区」や「ふるさと村」など自治体独自の都市農地保全活用支援策を採ってきた。それは、「農」のあるくらしこそ健全なアーバンライフだという政策を圧倒的な都市民が支持してきたからである。

行政はエコシティ、市民はエコライフ、企業はエコプロダクツ(クリアプロダクツ)と、それぞれ三者の目標となり、自然共生、環境共生、地域共生の3つが国民共通の生活目標とされるこれからの時代。生き物・循環・共生のルーツそのものである「農」の多面的意義を発揮させる都市計画へ転換

しなければならない。

農地だからといって農業的土地利用というわけではない。いま「農」は都市のインフラであり、「都市的土地利用としての農地農業」を認めていかなければならない。そのための施策、計画論、事業、市民サービスのプログラム作成などが、これからの行政担当者に強く要請されている。

## ニューライフのデザイン

### 多彩な「農」とのつきあい方

「農」は国の基、<sup>もとい</sup>という古いといわれよう。しかし、棚田ボランティアに汗を流す若者は「農」の世界をワンダーランドだと感じているし、都会育ちの若者の農業農村への新規参入希望者も多い。自分の力で、自分のスタイルで、自然とともに生きていけるアグリビジネスは新しいライフモデルだと考える人が増えているのだ。

いま「農」は、まちがいに新しくしているのである。

都心中の都心、六本木ヒルズの屋上田圃で港区の子どもたちは田植えし刈り取りもしてテレビの話題になっている。都心の盛り場、渋谷の区有地を区民要望が高いからと区民農園にする。世田谷区内を通る小田急電鉄の人工地盤では「アグリシティ」という会員制市民農園がオープンし、年会費13万円、特別会員52万円/2坪でも喜ばれている。

全国各地の市民農園では、応募者が多くて競争が激しく、なかなか大変だという。脱工業化、情報化と、バーチャル文明が支配的な時代に、人々は自らの生物的直感によるバランス感覚もあってか、都会人たちの自然回帰・農回帰がすすんでいる。

かつての肉体的重労働時代とはちがう。エアコン完備の軽労働で頭脳労働本位のサラリーマンにとっては、太陽の下、仲間たちと自然体験、農林体験に汗を流すことが真のレクリエーションとなる。また家庭の女性たちにとっても、アウトドアで気の合う仲間たちと花づくり、野菜づくりを楽しむ、できればこれを「オープンガーデン」に発展させて地域参加、社会貢献につながるのが何よりの生きがいになる。日本人共通の関心事は「祭り」と花といわれるが、「園芸福祉」をエンジョイする園芸福祉士資格取得者だけでも3000人を超える。まさにこれからは経済福祉から環境福祉の時代。いい環境でいい仲間と活動することで、自らの幸福につなげようとする市民が増えるだろう。

下の図は、市民と「農」の関係を示したものだ。農業に精を出すのも、遊びながら農とふれあうのも、農政の観点とは違って、市民にとっては等価である。国民みんなが何らかの形で「農」との関係を結ぶことを期待したいと思う。そのためには、都市内農地での「農」との出会いをスタート地点として、どんな場所でも、いろんな形の「農」とのふれあいプログラムをすすめるべきであろう。

お金、モノ、スピード、インドア、メカニックばかりを追求してきた20世紀型の楽しみとはまったく別の、「緑や農」とのふれあいによる仲間、ココロ、スロー、アウトドア、ナチュラルな21世紀型ライフスタイルをデザインしてもらいたいと心から願っている。

